

絵本の魅力

栗山 佑子

九州豪雨で甚大な被害を受け、地元で起きた奇跡の物語の絵本『川があふれた！ まちが沈んだ日一生きる力をくれたキジ馬くん』古山拓 絵／チームキジ馬君 編／2021年7月4日刊行）この絵本の制作を担当しました。

2020年7月4日未明に襲った熊本県人吉球磨地域の豪雨は史上まれにみる悲惨な被害でした。絵本制作については、青木辰司東洋大学名誉教授が人吉の土地柄、人柄に魅せられて長年親交を重ねていました。そこには郷土の伝統料理の店「ひまわり亭」本田節さん所有のキジ馬という、800キロもある特別大きな木製玩具が庭に横たわっていました。キジ馬君は地元に伝承する男の子の成長を願う木製玩具で、子どもたちの道すがら仰ぎ見る存在でした。

人吉球磨地方の街全体が豪雨による土砂交じりの水が民家を埋め、建物の3階近く埋もれて死者も出すという悲惨な未曾有の事態になり、ひまわり亭の本田節さんは途方に暮れながらも、炊き出し車で温かいカレーを作つて街に繰り出しました。そんな時、大きなキジ馬君がいないのに気が付きました。行方不明のキジ馬君が60キロも離れた八代湾の下流で発見されました。港からクレーン車で救出され店に運ばれました。大木は裂かれ、壊れた家具に交じりながらキジ馬くんはなんと無傷で戻ったのです。迎えた人々に感動の拍手が起こりました。

どんな困難にも負けないぞ、ド根性キジ馬君を絵本に残したいと本田節さん、そして災害に見舞われても自然と向き合う地元の人々の姿に胸打たれた青木先生は絵本を企画しました。クラウドファンディングで寄付を募り、たくさんの皆様から支援を受け、災害の日から1年後に絵本が完成するに至りました。

明日は我が身の災害国と言われる日本におい

て、このド根性キジ馬君の絵本を多くの人と共有するため、作家、画家との交流、イベントに参加するようになると、そこには、深く絵本に関わる人たちの世界がありました。絵本セラピストという人たち、絵本専門士養成講座、絵本未来創造機構、絵本ワールド、絵本を楽しむ大人たち、絵本図書館ネットワーク、作家のトークイベントや講演会など、様々な活動が行われています。絵本専門の書店が各地にあり、絵本の紹介や原画展や朗読会を催し絶え間なく尽力されています。

学校や図書館、施設に赴き、絵本の読み聞かせには再発見があります。本を開いて読むのとまた違った感性が聞き手に伝わり、子ども、大人も涙さえ見せる場面が見受けられます。絵本セラピストで読み聞かせをする山本潤子さんが「心を開く絵本の世界」と題して雑誌に絵本を毎回数冊紹介しています。その一部を引用します。

「せんねんまんねん」（まどみちよ・詩、柚木沙弥郎・絵／理論社）<ヤシの実がひとつ落しました。その地響きにミミズが飛び出し、ミミズはヘビに食べられてしまいます。そして、そのヘビを今度はワニが食べ、ワニは川に飲み込まれるのであります。川の水は土の中にしみ込み清水となってヤシの根が上へ上へと吸い上げ、ヤシの実の中で眠るのです。熟したヤシの実は立派なヤシの木になるために、また落下します。人間のいなかった時代、千年も万年も繰り返されてきた自然の営みをというのでしょうか。ヤシの実の落下が終わりのないピタゴラスイッチのスタートを切ったように思えました。>〈要旨〉

絵本の中に自然界の普遍的な法則を見出し、それを日常に引き寄せ自分の人生を俯瞰する。そんな絵本の読み方があったことを知りました。絵本は子どもだけのものではない、少ない文章と絵の中に人の生き方や多くの思いが詰まっていて、親子や、高齢者や、いろいろの立場の人がそれぞれの感性で楽しむものだということを教えられます。（くりやま ゆうこ：編集者）

子どもの本を選ぶ

子どもと本をつなぐ ～一人ひとりにぴったりを～

大村 裕子

「おすすめの本は何ですか?」「面白い本はどれですか?」子どもたちからよく聞かれる質問です。入学したばかりの女の子からは「わたしにぴったりの本はありますか?」と尋ねられたこともありました。

北校舎3階に位置する本校の学校図書館。今日もたくさんの子どもたちが本を探しにこの場所にやってきます。

授業との関わり ～分類について～

年度当初は全学年のオリエンテーションをおこないます。1年生には図書館の決まり、貸出・返却の方法、絵本の棚の場所などを中心に話します。2年生には図書館の決まりの確認、本の並びについても話をします。3年生からは日本十進分類法(NDC)についても触れ、本を探す手がかりになることを説明します。本校では返却処理された本は自分で本棚に戻すので、ラベルをよく見て棚に戻すように伝えています。

4年生の国語の教科書に掲載されている「分類をもとに本を見つけよう」は、分類のしくみを理解する大切な単元です。昨年度(2021年度)は学年の先生から依頼を受け、1学期にクラスごとに話をしました。最初に、オリエンテーションでも話しましたが、前置きし「図書館の本はその内容によって0~9類までの10のグループに分けられています。」と説明します。そして図書館の本が分類ごとに並んでいることを確認し、ワークシートにも取り組んでもらいます。その後、教科書の内容説明などを行った後、児童に「ここで問題です。犬の本は何類にありますか?」と質問します。ほとんどの子どもたちは4類の本棚に顔を向けたり、指差しをしたりします。

そこで動物の犬の本は4類の棚にあることを確認し、でも実はまだ他の本棚にもあると声をかけます。すると何人かの児童が6類の棚を指すので、「そうですね、6類にも犬の飼い方、育て方について載っている本があります。」と話すと子どもたちはそうかそうか、と納得の様子。さらに「それから4類、6類の他にも、例えば警察犬や盲導犬など社会で活躍したり、福祉に関する犬の本は3類の棚にもあります。」と説明し、最後に「一口に犬の本といっても、4類、6類、3類と色々な場所にありましたね。他にも物語やノンフィクションなど9類の棚にある本もあります。その本の内容によって本が置かれている場所は変わってくるので、自分の探している本が図書館のどの本棚にあるかを理解して上手に使えるようになってください。」と言って授業を終わりにします。

読みきかせ ～子どもたちの反応～

低学年の図書の時間には最初に1~2冊の絵本を読んでいます。中学年からは昔話や詩の朗読、本の紹介、新着本の案内なども行っています。

いくつかの小学校で子どもたちに本を読んできました。印象に残った子どもたちの反応です。

『はがぬけたらどうするの?一せかいのこどもたちのはなし』(セルビー・ビーラー作/ブライアン・カラス絵/こだまともこ訳/フレーベル館)を読んだときは、アメリカでは抜けた歯を枕の下にいれて寝ると夜中に妖精がきてお金にとりかえてくれる、というくだりをうけて3年生の子が「僕、抜けた歯を取っておいて、いつかアメリカに行くときにもってい

こう！」と宣言。

2年生のクラスで『歯がぬけた』(中川ひろたか作／大島妙子絵／PHP研究所)の絵本を読んでいたら、後ろの方の席が少しづわざわ。読んでいる途中で歯がぬけた子がいたらしく、本人は「急に歯が抜けてびっくりしたー」。こちらもあまりのタイミングの良さにびっくり。

『おまたせクッキー』(パット・ハッチンス作／乾侑美子訳／偕成社)ではピンポーンのベルとともに友だちが次々やってきて…という場面で「密だ、密だ～！」の声。きょうだい2人で食べようと思っていたお母さんの焼いたクッキーの取り分が少なくなることの心配より、今は人が増えて密になることが気になりますね。

暮らし方によって変わるそれぞれの動物の尾の役割を描いた『しっぽのはたらき』(川田健文／薮内正幸絵／福音館書店)。緻密で温かい動物が描かれたこの絵本を読み終えた後に「途中で気が付いた人がいるかもしれません、この絵本は前のページの終わりの絵と次のページの絵の動物がつながっています。」と言って別に用意していたもう1冊の本と合わせました。ひとつの動物となった絵を見て、子どもたちからは歓声があがり、拍手がわきあがることも。

「あくびが出るほどおもしろい話」(『ついでにペロリ 愛蔵版おはなしのろうそく3』収録／東京子ども図書館編)を高学年に読んだときは、最初は神妙な顔をして聞いていた子どもたちが、話の展開がわかりはじめるとクスクス笑いとなり、「なんとほっぺたが落っこちるくらいまずかった」箇所では大爆笑に。後日、子どもから「また、この間のようなお話をしてください」とのリクエストがありました。

頼りになります

5、6年生の図書委員はカウンターの貸出・返却業務の他に書架整理、おすすめ本の紹介カード作成など様々な仕事に取り組んでくれ

ます。先日は業間休みに、褪せてしまったラベルのはりかえ作業と一緒に行いました。きれいなラベルになった本を棚に戻し、整然と並んだ書架を見て「達成感がある！」とまで言ってくれました。

学校図書館は保護者や地域の方たちのボランティア活動にも支えられています。読みきかせの方たちには学年や季節に合った本を各クラスに出向いて読んでもらっています。掲示の方たちの装飾で館内が明るくあたたかな雰囲気に。また本の修理・整理等のお手伝いもしていただいている。読みきかせの新規参加者には活動前に講習を行い『よみきかせのきほん』(東京子ども図書館)、『えほんのせかい こどものせかい』(松岡享子著／日本エディタースクール出版部または文春文庫)の2冊を、参考資料として読んでおいてくださいと伝えます。

学区内には公共図書館が1カ所と家庭文庫もあります。学校図書館が閉館している夏休み等の長期休みは、公共図書館を利用するよう子どもたちに話しています。また長年、公共図書館で司書をされてきたご夫妻が週に1度開く家庭文庫は、絵本や読み物、工作などの選りすぐりの本が揃っています。本選びのアドバイスもしてくださり、頼りになる居心地の良い場所です。学校図書館の他にも子どもたちが色々な場所で本を手に取ることができればと思います。

先日、4年生の男の子に「手話の本はどこですか？」と尋ねられました。理由を聞くと「今、給食の時間が黙食だから、何かコミュニケーションがとれないかなと思って。」と教えてくれました。子どもたちの置かれている制約のある状況を思いながらも、その中で何ができるかを考え、行動しようとする姿にたくさんしさを感じました。

子ども時代に本との良い出会いがあることを願って、そして子どもたち一人ひとりにぴったりの本を手渡していくべきと思っています。

(おおむら ゆうこ：小学校図書館司書)

サンタクロースの住む部屋

成田 珠恵

今から15年ほど前、夫の仕事に伴い、当時6歳の娘と3歳の息子を連れ、家族4人で渡英した。イギリス南東部イースト・サセクス州のLewes(レイス)という町である。(写真・下左)

ある日、3歳の息子が通っている保育園の先生から、『エルマーのぼうけん』(ルース・スタイルス・ガネット／福音館書店／1963)のりゅうのぬいぐるみと日記帳を渡された。日記に「りゅうがどんな旅をしたかを書いて、次の日持ってきて」というのである。渡された日記帳を見ると、りゅうが日本を旅するのは初めてのようだ。息子と「日本のどこに行こうか」と一緒に考え、富士山の頂上に行くことにした。りゅうと息子は素晴らしい日本旅行をし、次の日は一緒に保育園へ行った。

また、6歳の娘は現地の小学校のReceptionクラス(1年生に入る前の準備クラス)に通ったのだが、この小学校でも同じようなことがあった。自分のお気に入りのぬいぐるみを学校にお泊まりさせ、「パーティーをするから持ってきてね」と言られた。当時、娘のお気に入りのぬいぐるみはピンクのうさぎの“うさこ”(今も我が家にあるのだが)で、お泊まりさせる日に、意気揚々と学校へ持って行った。翌日、ぬいぐるみたちはどんなパーティーをしたのだろうと、興味津々で娘は学校に向かった。付き添いの親は、いつもは校舎内に入る前に子供たちに「いってらっしゃい」と



言って別れるのだが、その日は親も教室に入つていいと先生に言われて教室を覗いてみた。そこは、ぬいぐるみ達がテーブルでお菓子を食べていたり、おもちゃで遊んでいたり、様々な姿の楽しそうな宴の場であった。娘を初め、子供たちは大喜びで、自分のぬいぐるみのもとに駆け寄っていった。



イギリスには『不思議の国のアリス』を初め、『クマのプーさん』や『トムは真夜中の庭で』等児童文学の名作が多いが、もともとあつた妖精物語や神話などをベースとしてファンタジーという分野が確立されたようだ。りゅうの旅を創り上げる、ぬいぐるみたちにパーティーをさせる等、イギリスでは子供たちを物語の世界に遊ばせ、想像力を養う、信じる心を育む、言い換えれば「ファンタジーの世界」を創り上げることを教育の場に取り上げているのだといえよう。

「心の中に、ひとたびサンタクロースを住ませた子は、心の中に、サンタクロースを収容する空間をつくりあげている。サンタクロースその人は、いつかその子の心の外へ出ていくてしまうだろう。だが、サンタクロースが占めていた心の空間は、その子の中に残る。この空間がある限り、人は成長に従って、サン



タクロースに代わる新しい住人を、ここに迎えいれることができる。」と

松岡享子さんは『サンタクロースの部屋』（こぐま社／1978）で述べている。

いま、息子と娘は妖精もサンタクロースも信じる歳ではなくなつたが、複雑な問題に対しても想像し、解決策を考えられるようになつてゐる。イギリスで経験した出来事は、二人に想像する力、見えないものを信じる心を培い、心の中に「サンタクロースを収容する空間」を作りだし、二人は「新しい住人」と会話しながら解決策を考えているのだろうと思う。

近年、図書館は「読書センター」だけではなく「学習センター・情報センター」としての

役割も求められている。情報化社会といわれる中で、子供たちの情報活用能力を育てる活動は大切である。しかし「読書センター」としての役割も、決しておろそかにしてはならない。イギリスでの経験は、現在、私が学校司書として活動するきっかけにもなっているが、「サンタクロースの住む部屋」を作り、想像力を養い、信じる心を育むために、学校図書館はいつでも子供たちを迎える、物語に遊ばせてあげられるような環境を作っていくなければならないと常に考えている。

（なりた たまえ：東京都杉並区小学校司書）

DMかたろぐ